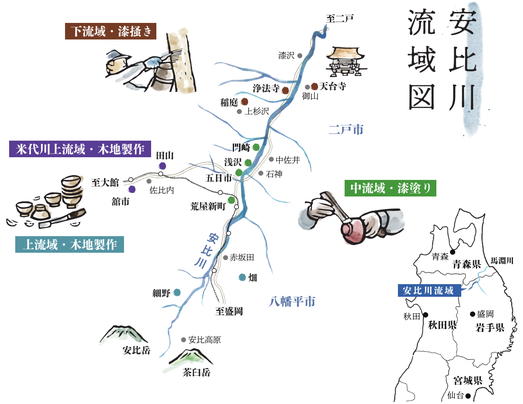
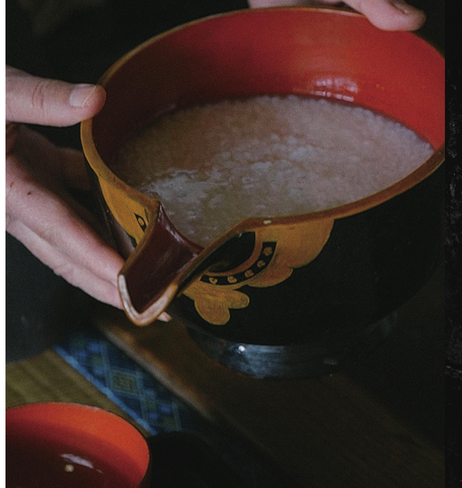
安比川流域図





安比川流域に受け継がれる伝統技術

奥南部漆物語

日本遺産

奥南部物語をめぐる地図はこちらから
奥南部漆物語スポットマップ

日本遺産ポータルサイト「"奥南部" 漆物語」

漆の園・浄法寺

ほんものにっぽんにのへ

「奥南部漆物語」オーディオガイド

漆生舎

八幡平市博物館

公式動画「奥南部漆物語」

八幡平市観光協会

二戸市埋蔵文化財センター

安比塗漆器工房

二戸市観光協会「いわてのてっぺん」

浄法寺歴史民俗資料館

発行
日本遺産奥南部漆物語推進協議会

お問い合わせ
岩手県二戸市産業振興部商工観光流通課
〒028-6103 岩手県二戸市石切所字荷渡 6-3
電話　0195-43-3213

岩手県八幡平市商工観光課
〒028-7397　岩手県八幡平市野駄 21-170
電話　0195-74-2111

椀師作業工程絵図

秋田川連の木地師・佐藤五郎右衛門が描いた絵図からひもとく椀づくりの仕事

一、山子の伐り出し

椀の材料となるブナやホオの原木を伐り出しているところ。この仕事に従事する者を「山子」と呼んだ。安比川上流域では、主に旧暦２月の堅雪を選んで行われ、６尺程どの長さに切って、沢に落とした。

二、春木場

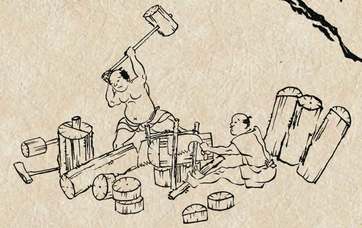
山で伐り倒した原木は沢筋に落として安比川の本流まで運んだ後、下流へと流送した。この作業は主に雪解けで水量が豊富な時期に行うため、下流の集落で丸太を引き上げる場所のことを春木場と呼んだ。職人たちはこの春木場からそれぞれの作業場に原木を運んだ。

三、漆掻き

安比川流域では主に下流域の浄法寺周辺で漆掻きが行われた。藩政時代は、漆の樹液だけではなく椀の原料となる実も採取した。そのため漆の木を殺さない養生掻きだった。明治以降は椀の需要が減ったため越前衆より伝えられた殺し掻きが広まった。

四、ブンギリ（玉切り）

川の流れを使って集落に運んだ原木は、すぐにブンギリ（玉切り）された。また玉切りした材料をさらに木取りする「寸法決め」「大割り」といった作業を行った。これらの作業は「荒型打ち」と呼ばれることが多かった。



十三、から研ぎ（内側）

地塗りで生漆を塗った木地は機械が毛羽立つので砥石で研ぐ。現在は、砥石ではなくサンドペーパーを使って研ぐ。

十四、から研ぎ（外側）

内側を砥石で研いだら、外側を研ぐ作業に進む。この場合、効率を優先し、ロクロに椀をつけて研いだ。

十五、漆クロメ

漆の精製にはナヤシとクロメがあり、ナヤシは生漆を攪拌し均一な状態とする作業。クロメは熱を加えて水分を飛ばす作業で、主に天日に当てながら攪拌して含水率を下げる。このクロメを経て上塗り用の漆となる。

十六、漆しぼり

クロメが終わった漆を和紙で漉し、細かなゴミを除去し、漆の粒子を整える作業。薄い和紙を何枚も重ね、丁寧に漉していく。この作業は今も全く変わらない形で行われている。

十七、上塗り

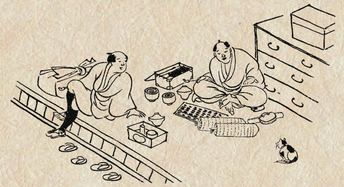
現在の安比塗、浄法寺塗では、中塗を何度も繰り返すが、かつての安比川流域の漆器は渋下地にいきなり上塗りを施すことが多かった。塗りの回数も１、２回程度だった。

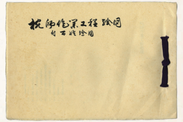
十八、蒔絵書き

安比川流域で製作された椀の多くは加飾はされなかったが、皿等には好んで絵が描かれた。その際、石黄やベンガラなどの顔料がよく用いられた。

十九、椀売り

三ツ椀などの普段使いの漆器は完成後、藁つとに詰められて出荷された。最盛期には仲買人が各地からやってきて漆器を買い付けたときれる。漆器製造業は、個人主の性か職人を雇って事業的に営む家もあり、販売については卸しや行商など多様な形態があったと推測できる。普段使いの漆器は二戸郡各地の宿場町などで開かれる市日で販売されることが多かった。





椀師作業工程絵図
佐藤五郎右衛門・絵
江田絹子・発行

秋田川連の木地師である佐藤五郎右衛門による江戸期の木地と塗りの作業工程絵図をまとめた貴重な資料である。昭和41年（1966）に限定500部で編者でもある江田絹子氏より発行された。本頁では、この絵図をひもときながら、安比川流域の椀作りを解説した。

奥南部漆物語

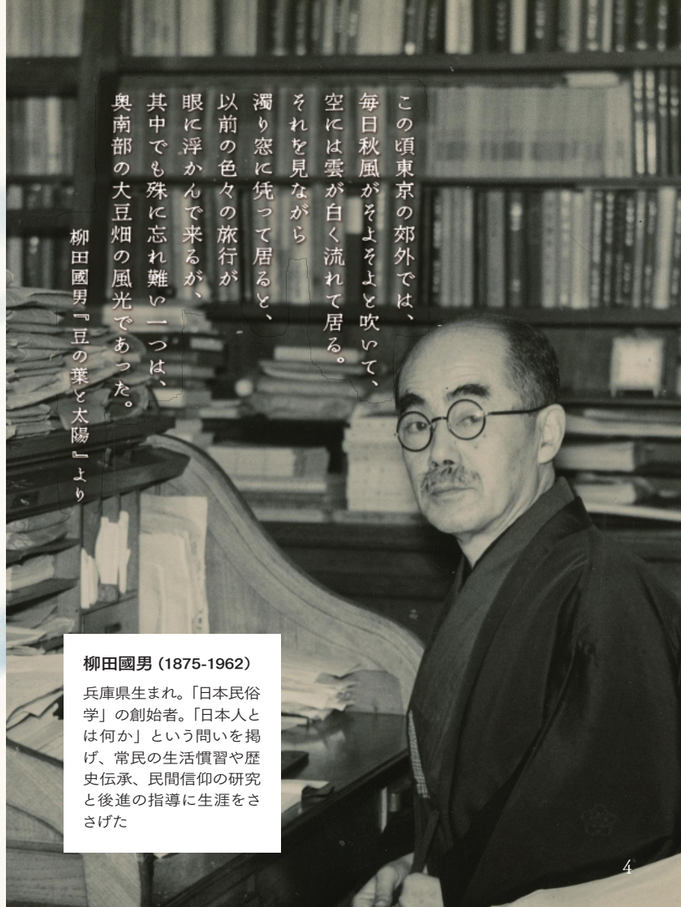
安比川流域に
受け継がれる伝統技術

岩手県北部、広大なブナの森を
源にして北に向かって流れる安比川。
その流域には古くは縄文時代から
漆を扱う知恵や技術が息づいてきた。
樹皮の奥から滲み出した漆の樹液が
人の手によって麗しいまでの艶をまとう。
そこに至るまでのひとつひとつの
営みがこの風土の表情である。
〝奥南部〟と呼ばれた地で連綿と
受け継がれてきた漆をめぐる物語。

柳田國男と奥南部。夏の終わりの歌と光

この頃東京の郊外では、毎日秋風がそよそよと吹いて、空には雲が白く流れて居る。それを見ながら濁り窓に凭って居ると、以前の色々の旅行が眼に浮かんで来るが、其中でも殊に忘れ難い一つは、奥南部の大豆畑の風光であった。

柳田國男『豆の葉と太陽』より



柳田國男（1875-1962）

兵庫県生まれ。「日本民俗学」の創始者。「日本人とは何か」という問いを掲げ、常民の生活慣習や歴史伝承、民間信仰の研究と後進の指導に生涯をささげた

菅江真澄の足跡を辿って柳田國男が秋田県の花輪（現・鹿角市）から岩手県の安比川流域へと旅したのは、昭和のはじめのよく晴れた秋の日のことだった。

二年後、柳田はこの旅の記憶の断片を『豆の葉と太陽』として短い随筆に仕立てるのだが、その内容に「柳田民俗学」の本質が現れる。道中の何でもない出来事を淡々と綴り、風に吹かれるような気楽さで旧南部藩領北部の風景を眺めながらも、柳田の言葉は風土の中心へと向かっていくのである。

そんな柳田の目を奪ったものが、「其中でも殊に忘れ難い一つは、奥南部の大豆畠の風光であつた。」と綴ることになる大豆畠だった。大豆はこの地方であれば珍しくない作物である。しかし、初秋を迎え早くも黄に色づく姿に、柳田はふと、厳しい自然に生きる民の心情を見出していく。その刹那、柳田の脳裏に浮かんだのが、「秋風が吹けばいの／豆の葉が散るわいの」という記憶もおぼろげな奥州の盆踊り歌だった。柳田はこの歌を噛み締めるようにして、若者たちが一心不乱になって踊りに酔いしれる姿を想像する。それは、秋風が吹けばわずか数日で農作物のすべてが葉を落とし、長く厳しい冬へと向かっていく風土と、そこに生きる者たちの痛切なまでの生への情熱に自らの思いを添わせるひとときだった。

列島各地を見聞し、「日本人とは何か」を問い続けた柳田國男にとって、奥南部地方とは哀切のなかにありながらも人間が宿す強さを想起させる土地だった。

『豆の葉と太陽』

昭和16年（1941）に創元社より刊行された柳田の随筆集。日本中を見聞した旅の記憶21編が綴られている。奥南部の旅は巻頭を飾っている

だんぶり長者伝説

秋田との県境、田山地区の米代川源流付近に伝わる長者伝説で土地の人々から愛されている。エピソードのひとつに長者夫婦は天台寺に願掛けし、姫を授かったというものもあり、菅江真澄と柳田國男も興味を示した

菅江真澄（1754-1829）

江戸時代後期の紀行家。天明5年（1785）に岩手北部と秋田鹿角地方をめぐる旅をし、「けふのせば布」としてこの地域の風俗を記した。写真提供＝秋田県立博物館

書斎でくつろぐ柳田國男（P4）が撮影されたのは昭和4年（1929）。翌年の昭和5年（1930）に菅江真澄の足跡を追って奥南部の旅に出た。柳田民俗学はフィールドワークの重要性を説くものだった。写真提供（柳田國男）＝成城大学民俗学研究所

安比川流域をめぐる

奥南部漆物語の歴史

―縄文から令和まで―

〝奥南部〟地域では、漆の文化を守り伝統技術を受け継ぎ今日の日本文化を支えています。安比川流域で縄文から令和に継承されている伝統技術と漆にまつわる歴史を七つの漆物語とともに紹介します。

縄文から始まる漆

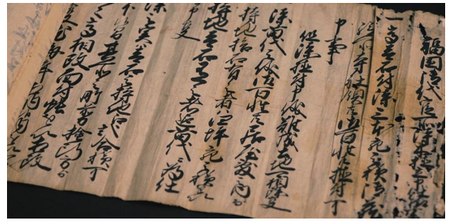
〝奥南部〟の漆文化の起源を辿ると、縄文時代まで遡る。安比川流域の縄文遺跡から朱漆の装飾が施された石刀や漆の付いた土器が発掘され、縄文の大昔から人々の暮らしのなかで漆が使われていたことが分かった。

〝奥南部〟地域はいつから漆の産地になったのか。それは定かではない。近江の国・石山寺造園に関わる奈良時代の古文書には「陸奥殿漆」と記され、〝奥南部〟を含む陸奥国（現在の東北地方）の漆を使用したことが推察できる。また同じ奈良時代、〝奥南部〟に天台寺が開かれた。天台寺の僧侶たちは、自ら使う器に漆を塗り使用していたとされ、これが〝奥南部〟の漆器製作の始まりと語り継がれてきた。

江戸の養生掻き

〝奥南部〟地域の漆が史料に登場してくるのは、江戸の藩政時代から。この時代の漆の採取方法は「養生掻き」と呼ばれ、漆の木を長い期間生かしながら、漆も採り、蝋の原料となる実も採るという方法がとられていた。

当時の盛岡藩南部利直公が家老に宛てた書状にこのような文言が記されている。「（漆の）木を枯らした奉行は処罰する」。藩の財政を支える産業として、漆と漆蝋の生産を確保するために漆の木を大事にし、力を入れていたことがうかがえる。さらに、盛岡藩家老席日記『雑書』では、番所に出された命令のなかで、漆と漆蝋は藩の許可なく他藩へ勝手に移出してはいけない品目として列挙されている。



漆の植え方や管理方法を指示する「福岡御代官所漆木植立申仕様書付」

明治の隆盛と昭和の衰退

明治時代に入ると、藩のしばりがなくなり漆蝋の需要が減少するなか、漆の生産は国内随一となっていく。漆の採取方法にも変化がみられ、「養生掻き」から一年間で漆の樹液をすべて掻き採り伐採する「殺し掻き」に変わった。この方法は現在の福井県から出稼ぎで〝奥南部〟地域へ来た越前衆と呼ばれる人たちによって広められた。

昭和になり太平洋戦争時は、爆弾や砲弾などの塗料として重要視された。国の統制品としてほぼすべて国に納められ、限られた量の国産漆は、高値で売買されていた。しかし戦後、外国産の安価な漆の輸入や生活様式の変化によって漆の価格は下落し、漆産業は斜陽の時代を迎えることとなった。

昭和12年（1937）頃、浄法寺町での漆入札会の様子

令和の今、産地としての誇りを胸に

〝奥南部〟には困難な時代にも、漆産地としての誇りを胸に、伝統を守ってきた人たちがいる。漆の生産を守るために設立された「岩手県浄法寺漆生産組合」。〝奥南部〟地域で生産された漆は、日本を代表する国宝建造物の修復に使われ、その品質の良さが認められている。また、平成27年2月（2015）には文化庁から国産漆の使用拡大の方針が示されたことで、漆の需要が増加し、漆産業の追い風となった。

〝奥南部〟地域の漆をより身近に感じられる施設も開設した。「安代漆工技術研究センター」「安比塗漆器工房」「浄法寺漆芸の殿堂・滴生舎」では、漆工職人の育成や技術継承のほか、地元の漆を使用した漆器の販売や漆の魅力を発信している。

浄法寺漆で修理された日光東照宮の陽明門